

意識と魂の間

——努力の心理学から原理の哲学へ——

メーヌ・ド・ビラン研究 (Ⅲ)

藤 江 泰 男

Maine de Biran au temps de la métaphysique des substances

Yasuo FUJIE

目次

- I. メーヌ・ド・ビランの思想的発展の概観, あるいは予備的考察
- II. ビラニズムの第一段階（努力の心理学）
 - 1) ビラニズムの成立前夜〔以上前々号〕
 - 2) 努力の心理学の確立〔以上前号〕
- III. 原理の哲学から最後のビラニズムへ
 - 1) 原理の哲学〔以上本号〕
 - 2) 精神的生, あるいは最後のビラニズム¹⁾

III. 原理の哲学から最後のビラニズムへ

われわれの第一回の論考冒頭で略述しておいたように、「努力の心理学」の時代として特色づけられるメーヌ・ド・ビランの立場は、1805年の『思惟の分解』から1813年の『心理学の基礎』の執筆断念のときまで継続されたのであるが、本稿では、その断念の経緯や原因について、つまり「努力の心理学」的見解の限界について、さらにその後のビランの哲学的回心の内実について論及することが課題となる²⁾。

「努力の心理学」段階のビランの探究の中心は、「原初的事実³⁾」として提示された原始

-
- 1) 目次の表現が、前回とは一部変更されていることをお断りする。
 - 2) メーヌ・ド・ビランの著作からの引用は、アズヴィの監修・責任編集による著作集を中心とするが、ときに、ティスラン版からの引用が必要となるので、前回の論考と同様に、二つの版の区別をA, Tという文字で最初に示し、その直後に巻数とページ数とを表記する。例えばA, III, p. 100. とあれば、アズヴィ版の『メーヌ・ド・ビラン著作集』第3巻の100頁のこと、T, III, p. 100. とあれば、ティスラン版の『メーヌ・ド・ビラン著作集』第3巻の100頁のことである。
 - 3) 『自然科学と心理学との関係』の校訂者B. バエルチはこう定義している。「原初的事実とは、自我・主体とある対象——物体、さらに世界——、抵抗する非自我として知覚される対象との関係のことである。自我はこの関係の中で、動因（意欲する努力）であると同時に認識（主体と対象との覚知）でもあるものとして構成される。だからこそ、ビランはこう語ることになる。《主体ないし自我、それが自分自身に対して存在しているのは、それが自己を知るかぎりでのことであり、認識するもの、それが作用を及ぼすかぎりでのことである》。(……) つまり、原初的事実とは、意識であると同時に存在 (existence)

的・二項関係のなかでの自我 (moi) のあり方の分析、そこで確定される身体的・物的存在と自我との関係の必然性の分析であったように思われる。意欲の結果として自覚される、身体的ないし物的抵抗との関係で主体、自由な意欲する主体が意識され、つまり自我が成立するという、自我のあり方のいわば〈原初的物質性〉の提示こそ、デカルトのコギトに対する最大の修正点であったように思われる。デカルトの主要テキストへのピランのコメントも事実いくつか残されており、著作集 (アズヴィ版『メヌ・ド・ピラン著作集』) の一部としてすでに公刊されているので、これ自体研究対象として興味深いものであるが、今回はピラニズムの第二段階の成立に関して関係あるかぎりで言及したいと思う。第一期ピラニズムの問題点の自覚からその乗り越えとしての第二期ピラニズムの構築という今回の論考の主題は、そうした身体論、物体論と深く絡みあっている。デカルト哲学やマルブランシュ哲学についてのピラン独特のスタンスの取り方が、すでにしてその乗り越えの努力や成果を示しており、カント哲学についてのコメントも、特に空間の位置づけをめぐる、実体論に対するピランの態度変更を検討するうえで格好のテキストとなっている。

あくまで「現象」のうちにとどまり、「現われ」のうちでの、つまり事実として確認できるかぎりでの自我を捉え、そのうちに物理的抵抗を位置づけた第一期のピランの「努力の心理学」の立場から、1813年以降、そうした現象を支える実体的ものの探究へとピランはますます専念するようになる。事実ないし結果としての「自我」に対する「実体的魂 (âme)」に、現象としての身体・物体に対する実体的物質・延長に、現象的結果の本性的原因 (力) としてますます関心が向けられ、分析されることになる。まずは、変化の理由から検討することになるが、この第二期のピラニズムを代表する著作、『自然科学と心理学との関係』を中心に、その間の事情を見てゆくことにしよう⁴⁾。

1) 原理の哲学 (ピラニズムの第二段階)

さて、確立したはずの「心理学的自我」の限界の自覚、その乗り越えとして新たに提示される哲学的「観点」、つまりピラニズムの第二段階の解明をめざす本稿の取り扱う著作は、すでに述べたように『自然科学と心理学との関係』(以下、『関係』と略記する) である。「原理の哲学」の段階とも称されるこの第二期ピラニズムの代表作は、アズヴィ版でも第8巻 (校訂者ベルナール・バエルチ) として、すでに刊行されている⁵⁾。

でもある」(A, VIII, p. IX)。Cf., 彼の主著『メヌ・ド・ピランの存在論』(édition universitaire fribour suisse, 1982), p. 10.

4) ちなみにわれわれは、ピランの思想的変化の段階としては第三段階について、ピラニズムの成立以降で言えば、その第二段階について言及しようとしているのであるが(本拙論の第一回, 第1章参照), 『関係』の校訂者でもあり、前註で参照した著作『メヌ・ド・ピランの存在論』でつとに名高い B. バエルチは、ピランの思想的変化、グイエ言うところの「回心」は、主要なものとしては二つのみ、と見ている(彼の論点からすれば、ということではあるが)。つまり、「心理学的回心」と「存在論的回心」の二つであり、ピラニズムの成立を告げる回心(心理学的回心)と、今回本稿で取り扱う著作に関わる「存在論的回心」のみである。「第一の回心はピラニズムへのピランの登場を画する。原初的事実の発見が、彼の哲学的自立の獲得を可能にするのである。したがって、それはわれわれの研究の出発点となるであろう。この原初的事実の分析から出発して、われわれはどのように、ピランの存在論が順次形成されたのかを見たいと思う」(Ibid., p. 4)。

5) Maine de Biran Œuvres, Tome VIII ; Rapports des sciences naturelles avec la psychologie et autres Écrits sur la psychologie ; édité par Bernard Baertschi. (J. Vrin, 1986) ベルナール・バエルチの校訂で、『自然科学と心理学との関係』を中心に、心理学に関連する著作や書簡や、『関係』と同時期に執筆された関連小論多数が収められている。

しかしながら、この第二段階の〈成立〉について論ずることは、その内容的問題はともかく、成立年代についても、実は容易ではない。いわゆる「努力の心理学」の立場つまり第一期ピラニズムの集大成となるはずであった『心理学の基礎についての試論⁶⁾』(以下、『基礎』と略記する)が1813年に決定的に断念される⁷⁾。そのあとを受ける形で執筆されることになる著作(それが今回取り扱う『関係』である)に、自身の代表作となることをピランは期すのであるが⁸⁾、その転進を願った著作の思想的統一性についても、従来から多々異論が提出されており(それは編集・校訂の問題として極めて深刻であり、B. バエルチ校訂の『関係』の冒頭解説部分には、歴史的経緯も含めて詳細な紹介と分析がある)、また、二つのピラニズム間の関係についても、やはり問題がある。一つの立場が消えて別の立場が現われたのか、あるいは併存するのか、あるいはまた、第一期ピラニズム(いわば「心理学的ピラニズム」)が第二期ピラニズム(いわば「存在論的ピラニズム」)に何らかの形で統合されることとなるのか、といった問題である⁹⁾。

ここで焦点となるのが、自我のあり方、その継続性や永続性の問題である。心理学的分析はなるほど、ピラン言うところの原初的事実に内在的に析出され、いかなる懐疑によっても否定されることのない絶対的現実性を保持した実在性を得ることができるが、しかしそれはまた、別の観点からすれば、現象に内在するその強みが本性的弱みともなるのである。デカルト哲学にあっても、コギトの現実性が条件づけられたものでしかないとして、際限なく批判に晒されてきたところである。そうしたデカルト的コギトに対する批判的見解の表明であったはずのピラニズムも、それが現象としての事実に基づけられた言明であるかぎり、ある種の制限性、つまり時間的に相対的な自我のあり方で満足せざるを得ないのは確かである。この種の限界は、自我が〈ある種の〉実体性をもたないかぎり乗り越え不可能である。デカルト哲学風に整理すれば、「思惟(する我)」から「思惟するもの」への実体論的移行の問題であり、ここに飛躍・実体論的飛躍があるとしてデカルトは批判される。それは、ピラニズム第一段階からすると、決して許容できない自我の実体化なのである。

この点に関して重大な思想的変身が生ずるのが、1813年の「第二の回心」である¹⁰⁾。この回心が、一方で『基礎』の仕上げを断念させることになるし、新たな著作、『関係』を構想させることになる。自己の体系に潜む矛盾や弱点に眼を背けないつもりであれば、その

6) *Essai sur les fondements de la psychologie*. T. VIII-IX. アズヴィ版でも2001年、VII-1, 2として、ようやく出版の運びとなった。

7) A, VIII, p. XX 「まさにこの時期(1813年)にこそ、彼は『基礎』を出版しないこと、また、『関係』の起草へと彼を向かわせることになる諸省察を再度採り上げることを決心したのである」。Cf., F. アズヴィ『メーヌ・ド・ピラン 人間の科学』(J. Vrin, 1995), p. 291.

8) これまでの著作についての不満、今後の世代に残す書物としての自身の次回作への自負など、当時の日記には縷々述べられている。Cf., 1816年11月25日付けの日記(*Journal*, I, Editions de la Baconnière-Neuchâtel, 1954, p. 239)。若書きの作品たる『習慣論』のみで自身が評価されることを潔しとしないピランの真情が、率直に吐露されている。

9) Cf., B. バエルチによる『関係』の解説部分にこうある。「『努力の心理学』に〈絶対の哲学〉が加味される(s'augmente de)とわれわれが言うとき、後者は単に前者へ添加されるだけだと言おうとするのではない。そうであれば、ここで回心が論議されることなどあり得ないであろう。つまり、ピランは彼の哲学に新たな段階を単に付加するのではない。《加味する》という表現がすでに指示するように、〈絶対の哲学〉の利益のために〈自我の心理学〉が放棄される、ということでもない」(A, VIII, p. VIII)。

10) Cf., グイエ, 前掲書, 第4章第3節(1813), およびバエルチの『関係』解説部分, A, VIII, p. VIII.

体系、その見解の根底を修正するしかない。体系の根源的組み直しが必要になる時期、その必要性を決定的に自覚する時期が、この1813年という年なのである¹¹⁾。では、その自覚と新規の構想について、『関係』のテキストに沿って検討してゆこう。

(1) 方法的・対象的違い

自然科学と心理学との方法的違いを軸にして、人間理解に対する、いわゆる科学的方法の有効性を検討しようとするメヌ・ド・ピランは、本書の冒頭部分から、すでにその本質的差異に言及しており、その分析や展開のための出発点たる定義を11項目にわたって述べる件で、彼の基本的方向性を明確に打ち出している。「序論」の定義9¹²⁾ではこう語る。

9. 外的現象ないし直観と結合されると、覚知は、私が一般に表象と呼ぶところの事実を構成する。その表象は、自らとともに、(1)表象作用を行う主体の内的な意識、(2)その分割不可能な形式が空間であるところの外的現象としての直観による認識、(3)それにより直観の現象が成立するところの、ある存在・実体ないし原因の想念 (notion) ないし信念 (croyance)、をもたらす¹³⁾。

表象作用という現象的事実のうちに、その支えとしての実体ないし原因の想定を考え、それを、この時期のピランを特徴づける術語である「信念」によって表現している。本論での分析に入る前の定義部分で、彼の思索の向かう方向が鮮明に表明されている、と言えよう。外的対象について表象が成立しているということは、その主体の自覚も、対象の認識も、その表象「現象」を可能にしている「実体的もの」(存在・実体ないし原因)への素朴な信念も、ともに成立しているということである、とピランはこの定義レベルですでに主張しているのである。

直接的にしる媒介的にしる内的な覚知は、本質的に自らとともに、内在性ないし因果性の関係のもとに、感覚ないし覚知される内的な現象の主体にして原因であるものの実在性をもたらす。そこで、われわれが現に納得しているある強固な確信 (persuasion)、つまり、同一的で永遠的な主体、自ら意志的に生み出すある種の様態や現象の自由な原因、意欲もせず作用も及ぼさずただわれわれが感じている他の様態の感受しうる原因として、われわれが存在しているという確信を揺るがしうるような懐疑論的論拠など存在しない¹⁴⁾。

引用文の後半では明言しているように、何らかの形で意識をとまなう認識があるとき、

11) この点について B. バエルチはこう述べている。「そうではない。問題なのは、その正否はともかく、ピランがそれまで無視してきた実在性の次元の活用なのである。その活用が、一方で、この哲学者がその後専念することになる多数の問題を開花させることになり、他方で、努力の心理学のハーモニーを阻害することになり、努力の心理学は、新たな要素と新たに採用された観点との関係で、再考され変様されねばならなくなる。この課題を極めて重要だと判断したので、ピランは『心理学の基礎についての試論』の出版を断念し、彼の思考を新たな作品の中で再度定式化しようと思ったのである」(A, VIII, p. VIII)。

12) ちなみに、項目の番号自体は校訂者の補った数字。

13) 『関係』A, VIII, p. 10.

14) *Ibid.*, A, VIII, p. 11.

つまり覚知が成立しているとき、その覚知の主体たる自我の存在のいわば「永遠性」、ないし持続する実在性は確信されており、懐疑の対象となり得ない、とピランは語っているわけである。私の存在のみではなく、認識の外的対象についても同様の論理で彼は語ろうとする。もっとも、ここではまだ定義レベルないしその解説的部分ではあるが……。『外的覚知はまた自らとともに、ある対象ないし外的原因 (*cause étrangère*) をもたらす¹⁵⁾』と語るゆえんである。さらにこう展開している。

それ〔外的原因〕なしでは、われわれの意志が生み出すのではない直観の現象が実現することも、あるいは、われわれの感官に現象し始めることもないであろう。しかしここでは、原因にして持続しうる対象という想念、つまり外的実体の想念は、現象と連携しているだけであり、自我から外的対象へと移されるだけであり、内感の事実から演繹される二次的な明証性しか享受し得ない。つまりその内感のうえに、この明証性は依拠する必要があり、内感によってのみ正当化されるのである¹⁶⁾。

実在性なり実体性の確実性の順序がまず「主体」からであること、外的物体の実在性の確信はその後であること、二次的な明証性という表現で、その明証性の依存的性格が、自我の絶対的実在性に依存するものであることが、この件ですでに明記されている。実体という言葉、原因という言葉が肯定的に使用されるのが、本段階のピラニスムの特徴であるが、その実体性にも、ある種の順序や秩序があることを忘れてはならない。あくまで、自我の確信、現象としての自我と抵抗との確信という、否定しがたい現象的事実が出発点になっていることは、この段階でも真実であり、単に現象学的心理学から実体論ないし本体論に移行したのではないことが分かる。

自然科学と心理学との関係を主題とする本書『関係』において、その始まりからピランは、「原初的事実」として自身がすでに提示しておいたものに、今回も準拠しつつ展開することを予告している。一切の認識の故郷たる原初的事実が単純な要素によって成立していること、複数の要素からなる複合的事実であること、つまりは原初的「関係」であることを、ここでもあらかじめ再確認して、今後の展開の方向を予告することになる。つまり、

しかしこの原初的事実、一切の認識の源泉たる原初的事実は、それが自らとともに原因とその結果との、主体とその永続的様態との分割不可能な感覚 (*sentiment indivisible*) をもたらすがままに理解さるべきである。したがって、それはなお一つの関係であろうが、しかし、もはや事後的な分析を許容しない関係である。二次的な関係ないし事実 (……) と違うところである¹⁷⁾。

原因・結果の関係は、この意識の原初的事実と深く関わるところであり、この事実に関係づけることで、その概念の成立や関係の認識が本来的に可能になる、とピランは考えている。外的物体に関わり、それを認識するための学問たる「自然科学」と自我の何たるか

15) *Ibid.*

16) *Ibid.*

17) *Ibid.*, pp. 8-9.

に関わる学問たる「心理学」との差異ないし共通性は、この原初的事実との関わり方次第であることがわかる。「事実を観察し、分類し、法則を措定し、原因を探求する¹⁸⁾」というベーコン以来の自然科学に共通する方法が、どこまで心理学、あるいは「人間の科学」に通用するかが、この時期のピランの最大の関心事だったのである。

こうした学問相互の関係の問題は、つまりは学問の方法の問題であり、その方法論的差異が取り扱う対象の相違と重なる形で、序論においてすでに、ピランによって提示されているのである。

「外的事実」たる複合的事実を対象とする「自然学〔物理学〕」に対し、「内的事実」に関わる「生理学」と「心理学」、内的で器質的・身体的な現象の科学たる「生理学」に対し、「内感の原初的事実」を学問の対象とする「心理学」という三つの学問を採りだし、自然科学的方法を素朴に原初的事実に適用することの不毛さを語るとともに、本来「心理学」の請け負うべき課題のうちに、科学全体の基礎付けの可能性を見ようとしている。物理学も生理学も自然科学としての方法的共通性をもち、そのかぎりで共通の弱点（現象的事実のみ関わるという特質）をも共有しているから、学問の基礎付けを果たし得ない。心理学は、その対象をいわば形而上学的に思索するとき、本来形而上学に期待されていた課題を、自然科学に対して果たしうる、とピランは考えるのである。その意味で、心理学という術語は、現象学的論考でよくあるように、形而上学ないし哲学との関係でいくぶんネガティブなニュアンスを付与されているわけでは決してない。ピラン自身はこう語っている。

内感の原初的事実、あるいはむしろ「特別にユニークな (*unique sui generis*)」原初的事実は、自己のうちに「類」の性格と個体の性格とを統合して保持しているのだが、その原初的事実は、根源的で単純な関係、ないしは、現象的な諸項のうちに解消し得ないような関係を本質としており、そこでは、原因と結果、主体と能動的様態とが、ある努力 (*effort (nisus)*) ——その意志に従う筋肉は自身の器官である——についての同一の感覚ないし同一の知覚のうちで統一されてある。かかる努力の本来的印象 (*impression originelle*) にこそ、力ないし原因についてのあらゆる観念は由来するのである¹⁹⁾。

こうした原初的事実ないしそれに由来する事実をその解明の課題とする心理学は、「対象の現象的部分と主体 (*sujet*) の実在的部分とを区別しながら、内的および外的事実の十全的な分析を目指す」学問であり、「かくして、この事実の真に形相的要素を認識しようとするのだし、原因と実体の想念を、それらの第一の源泉に呼び戻そうとし、れわれわれがそれらに付与する絶対的実在性を正当化しようとする。かくして、意識ないし自我の存在の明証的で不可抗的な事実に基づけることで、現象の科学に一つの基礎を与え、その堅固さを保証しようとする²⁰⁾」学問なのである。

18) *Ibid.*, p. 3. 校訂者によれば、これは P. Prévost の著作からの着想だという。『関係』の後註 2 参照。

19) *Ibid.*, pp. 13-14.

20) *Ibid.*, p. 14. Cf., 「心理学のみが、自我の意識のうちでこの根底ないし基盤を付与するのである。それは第一のまったく内的な経験に依拠するのであるが、その観点と方法的プロセスにおいて、経験的〔実験的〕科学と称されるものと異なっている」(*Ibid.*, p. 15)。

心理学のみがこうした野望をもち、学問に基礎と統一を与えうるのは、あげて、「自我の意識」のうちで、それを探すことができるからである。その本来の領域で、原初的事実に謙虚に耳を傾けることができれば、それは心理学の射程のうちにあり、この時期のメニュー・ド・ピランは考えたのである²¹⁾。

(2) 従来の形而上学的探求の問題点

そこでは「観点や方法的プロセス」において異なる他の自然諸科学の基礎付けをピランは目指すことになるのであるが、これは従来は形而上学ないし第一哲学が課題としていたものである。単に心理学という別の学問を創造するというのではなく、従来行われてきた形而上学的探求への批判がここに展開されることになる。自然科学として心理学を形成することは問題にならない。心理学の形而上学化ないし形而上学の心理学化が今後志向されることになる。デカルトやライプニッツ、カントが論究の対象となるのも当然のところである。その評価の分岐点となるのは、まさに原初的事実の取り扱いの差異である。つまり、

デカルト、ライプニッツ、カント、および彼らの弟子たちは、純粋な形而上学ないしは存在の普遍的で必然的な関係の学問に専念した。彼らは原因、実体の想念から出発した。こうした想念から何らかの原初的事実にまで導かれうるなどとは気づかなかったように思われる。(……)²²⁾

こうした従来の形而上学的基礎付けにおける欠陥を、原初的事実が正しく自覚されていない、把握されていないことのうちに見るメニュー・ド・ピランは、学問相互の観点や方法上の違いに対する認識不足を、十七世紀以降の偉大な哲学者たちのうちにも認めている。つまり、「純粋に経験的な心理学と純粋に形而上学的な教説との中間的な観点」を採用しながらも、ピランのめざす本来の心理学に彼らは到達できなかった、と彼は哲学史の歩みを振り返っている。ピランにとって、それまでの学問的蓄積で満足できない理由は、認識の確実性というより、その認識対象の実在性が保証されていない²³⁾、ということであった。認識の確実性に加え、存在の保証も与えうるような「本物の心理学」をこれまでの形而上学者たちは提示できなかったし、自然科学者たちにしても然り、と彼は言うのである。

その学問的对象としては、死んだ自然 (nature morte) あるいは生きた自然 (vivante) の現象のみに関わる他の学問 (物理学と生理学) との関係を確認することで、この学問 (心理学) の主要基盤 (premières bases) を据えるよう、私は努めるであろう²⁴⁾。

21) ピランはまた心理学を「第一科学 (science première)」とも称している。「この第一科学は、可変的で特殊的な現象を捨象しつつ、まずは一切の事実に共通の形相的要素に専念する」(Ibid., p. 14)。

22) Ibid., pp. 15-16.

23) 「純粋に経験的な心理学と純粋な形而上学的教説との中間的な観点到位置する、幾人かの優れた精神の試みにもかかわらず、われわれにはなお、理性的ないし基礎的な本物の心理学が欠けている。存在、原因、実体についてのわれわれの認識の確実性のみならず、その実在性についても十分な保証が見いだせるような本物の心理学が欠けているのである」(Ibid., p. 16)。

24) Ibid., p. 16.

今回われわれの論考の主題となっているテキストが、忠実に訳すと『自然諸科学と心理学との諸関係』という表題をもつゆえんである。心理学を正しく確立することは、つまり自然科学の存在論的基盤を確保することであり、学問的關係において言えば、自然諸科学を基礎付けられるような心理学を成立させることである。つまりは、自然科学的心理学ではなく、第一心理学ないしは形而上学的心理学を確立すること、これがメヌ・ド・ピランの本書での探究の核心である²⁵⁾。實在性ないし存在性、あるいは実体性をどう保証し、それを心理学のみならず、生理学、物理学にどう適用するか、という問題である。實在性や実体性に関するメヌ・ド・ピランの立場が、ここで1805年段階〔努力の心理学の段階〕とは明らかに変化していることを確認しておくべきであろう。ただし、それは単に認識論的变化に尽きるものではなく、存在論的变化、あるいは「信念と認識」との根源的差異への注目という変化でもある。

(3) 原理・実体の信念

原理的もの、実体的ものの先行的存在の確信、つまり、信念の觀念に対する先行性の主張は、これまでいくつかの場面で論じてきたように、われわれの基本的思考法、日常的思考の基盤を問うところから起因するものである。『関係』の展開のなかで、「反論(objections)」という表題のもとに、これまでの思考法や形而上学者たちを批判し糾弾する件で、彼はまずそのことをはっきりと表明している。

あらゆる教説は一般に、それが純粋な形而上学のものであれ、経験的な心理学のものであれ、なんらかの存在、実体ないし原因の絶対的實在性を、その必然的な出発点としてもっている。われわれのうちに生み出される何らかの感覚作用、変えないし觀念によって顯示され始める以前に、それは現存するものと考えられ、あるいは信じられているのである。(……)²⁶⁾

こうした「絶対的所与」なしで済ませようとしたり、それを敢えて演繹しようとしたりする教説は、いずれも、「論理的同一性」のうちで悪循環を重ねるか、真正の「誤謬推理」に陥るかであったことが今日明白になった、とさらに批判的に論及したのち、メヌ・ド・ピランは、「それはつまり、必然的かつ暗黙に、原理的に〔始まりにおいて〕、われわれにとって科学とは決して同一でない仕方で、われわれは實在的存在(existence réelle)を知っているものと想定される、ということである²⁷⁾」と総括している。

ここで批判的に言及されている教説が、デカルトのそれであり、またコンディヤックの「感覚論」的教説であることは明らかであろう。コンディヤック的なイデオロギーに特徴的

25) 「真に第一の哲学」としての心理学について、事実、本書の結論部分でピランはこう言及している。「心理学は、それがかわる主体・主題(sujet)の本性のゆえに、外的事実の前に位置し、存在と原因の客観性の条件を画定すべきなのである。それにとっては、原初的事実を観察ないし確言することは、すでにして悟性の原初的則を認めることであり、動力因の想念すべての正当な価値を確定することなのである。自然科学が盲目的信頼のもとに依拠する第一の所与を正当化するという課題は、まさにこの真に第一の哲学〔心理学〕にこそ属するものなのである。(……)」(Ibid., pp. 213-214)。

26) Ibid., p. 52.

27) Ibid.

な感覚一元論にも、デカルトによる存在の「演繹的」論証にも、ともにピランは同意できないことを、ここ「反論」の節の冒頭部分で、すでに鮮明に表明しているわけである。それはまた、彼自身のある種の自己批判であるとともに、今後の方向性をも併せて吐露している件でもある。

さて、そのデカルトについて、自らとの存在へのスタンスの違いを、まずは彼の「神の存在証明」のなかに確認している箇所を次に見てみよう。それはまた、本書『関係』のなかで、認識にかかわる基調音たる「観念と想念の違い、認識と信念の違い」を明言する場面でもある。

デカルトは神の実在的で絶対的な現存を、必然的で無限で優勝的に完全なある存在の観念、彼のもつ観念から結論づける。というのも、かかる存在が現実実に実在しないのであれば、その《想念》がどうしてわれわれのうちに見いだされるというのか。この深遠なる形而上学者が同じ論法を、存在、実体、原因などあらゆる想念になぜ拡大しなかったのか、私は不思議に思う。われわれの一般観念や集合的観念の場合と異なり、かかる想念をわれわれが形成するのではないことは明らかである。つまり、出来合いの想念を、その実在的で、普遍的、必然的な特性とともにわれわれは見いだすのである。(……)²⁸⁾

デカルトの「第三省察」の頂点的論理ともいうべき神の存在証明、神の観念の原因を問うことからその必然的存在を論証することになる、いわゆる「神の存在の第一証明」を批判しているのである。上の引用箇所にも明記されているように、デカルトのいう神の「観念」がピランでは「想念」として受け止められ、展開されている。デカルトが「神の観念」のもとに見ていたもの、感じていたものを、ピランはそれ以外の存在、実体、原因などにも敷衍しようとするのである。存在についてのわれわれの感覚は、ある認識の基盤をなし、それに先行する形で成立している、と見なすのである。そうした存在感覚、因果性の素朴な前提事項を、ピランは「想念」ないし「信念」のうちに決りだしている、と言えようか。神の存在を証明する論理は、またそれ以外の存在についても、それ以外の実体についても、つまりは、原因についても同様の適用が可能である、とここでピランは明記している。「実体が現実存在していないとすれば、われわれはどうしてそれを信じ、それを言葉で主張することができるというか。さらに、そうした実体に対応する何ものもわれわれのうちに存在しないとすれば、どうしてわれわれは、そうした言葉を保持しているというのか²⁹⁾」。存在に対する、存在の想念に対するピランの思い（信念）が素朴に表明されている一節である。存在論的志向を強めるこの時期のピランではあるが、デカルト的存在論との違いもまた明白に表現されている。これについては、『関係』と同時期の作品である「デカルトについてのコメント³⁰⁾」で確認することもできるが、そのテキストに沿った分析はわれわれの今後の課題として残し、本稿では、『関係』のなかで確認されるかぎりで言及することに

28) *Ibid.*, p. 63. ギュメによる強調は筆者。

29) *Ibid.*

30) 「形而上学的省察についてのコメント」(1813年)「デカルトの省察についての覚え書」(1813-15年)など、デカルトのテキストに直接註解を試みた著作も残されており、アズヴィ版では、他の十七世紀の哲学者たちのテキストをコメントしたものと併せて、すでに公刊されている(A, XI-1, 1990年)。

したい。

メーヌ・ド・ピランのめざすところは、すでに明白である。コンディヤック的な感覚一元論に依拠して論理的トートロジーに終始するイデオロギーの立場にも、観念から存在をも演繹するというデカルト的な理性的演繹論にもともに満足できないピランは、その「中間的方法」を求めると明言する。コンディヤック的な感覚論ないし論理主義もデカルト的な演繹の形而上学も、ともに前提として（暗黙のうちに）承認していることを、顕在的に理論化するような中間の立場、心理学的にして形而上学的な方法、つまりは「存在論的観点」の確立を目指すわけである。この「反論」の節の最後で、彼はこう語っている。

それ（哲学の第一の問題）が解かれるのは、いわば中間的方法（*méthode moyenne*）によって、つまり感覚と観念しか認めない外的経験にすべて依拠する教説の方法と、生得的な想念ないし観念を認めるア・プリオリな教説の方法との間にある中間的方法によってであろう³¹⁾。

存在にかかわる「想念」が、コンディヤック風に「感覚」によって形成される観念によって説明されることも、デカルト風に生得「観念」から、つまり経験からある種独立させて、感覚的観念とは異なる形で論証されることも潔しとしないメーヌ・ド・ピランは、二つの「グラント・テオリー」、二つのシステム」の中間に、その方法と真実とを探ろうとするのである。経験に基づきながらも可変的な感覚や観念の性格を超越する認識手段を探すこと、永続的なないし絶対的性格を保持しつつもデカルト的観念の孕むハンディキャップたる〈生得性〉に依拠しない観念、ピラン言うところの「想念」すなわち「知性的想念」を介して、諸体系をその基盤において支える〈存在、実体ないし力〉の絶対的実在性を彼は確証しようとする³²⁾。そうした想念の原初の成立の場合こそ、第一期ピラニズムが見いだし、詳細に記述していた原初的事実、意識の原初的事実の場であり、観念や感覚という言葉に替えて「想念」という術語で展開される、絶対的実在性の基盤の発見〔ないし再発見〕にこそ、第二期ピラニズムの核心があると言えよう。

（4）異なる二つの観点（原理の哲学の到達点）

われわれは、歴史的考察ないし回顧的吟味に、スペースを割きすぎたかもしれない。最後に、ピランの本書『関係』での到達点を、「観点」ないし学問的方法の差異に的を絞って確認しておこう。それは、この時点のピランの哲学的到達点であるとともに、さらなる変容のための出発点ともなる見解である。

それはつまり、内的観点と外的観点との還元不可能性の立場、相互限定ないし一元的還元拒否の姿勢と言ってもよい。これまでも見てきたように、主要な形而上学的体系の批

31) 『関係』A, VIII, p. 66.

32) 「実体、力ないし原因の想念が、他のものと違って、感覚による観念でも抽象物でもないことを私は証明しようとした。いまや私の課題として残されているのは、それらの想念が知性的な想念であって、生得的でもなければどんな経験からも独立しているわけではない、ということを明白にすることである」(Ibid.)。

判的検討から、それは染み出したものであるが、デカルトに対する評価の仕方は、他の哲学者や形而上学者への批判と較べて、微妙なニュアンスの差を湛えている。少なくとも、コンディヤックやライプニッツに対する否定的評価とは明らかに異なるニュアンスで、その体系的立場が吟味されている。コギトの評価に関する表現、「ピラン的コギト」の提示のうちに、それは明瞭に示されている。

つまり、確実な命題を「私は考える (je pense)」や「私は感覚する (je sens)」から始めるのではなく、「私は意欲する (je veux)」、「私は活動する (j'agis)」から始めるべきであると語り³³⁾、そこでは、身体と不可分に結合したものとして意志する主体が捉えられる、と見なすことで、デカルトのコギトに特徴的な、身体性や物質性から分離された限りでの精神の存在の確実性を、事実において否定するのである。原初的事実の「努力」ないし「意欲された努力」に基づくということは、つまり「私は意欲する」という原初的事実に準拠して考える、ということなのであるから。

さらにまた、コギトの後半の命題も批判の対象となる。「私はある (je suis)」とは「私是一个の存在である」ということであるが、デカルト的タームで表現すれば、そこには「考えるもの」、つまりある種の実体性が挿入されており、前半の〈私〉と後半の〈私〉とは内容が異なるにも関わらず、同じ〈私〉で表現され、連続的に理解されるかのように提示されている³⁴⁾。これはピランの認めうところではなく、「事実の真理」と「信念の真理」とが混在して提示されている、というわけである。確実に認識できるもの(考える私)と「信念の対象」として承認されるもの(考える実体としての私)とが混在している、という指摘である。事実、原初的事実のなかで現象的に確認できるもの・「私は考える」によって、それ以上のもの・「実在性」、「本体的もの」、信念の対象としてしか存在し得ない「想念の対象」が提示されてしまっている、のである³⁵⁾。

原因や実体性といった対象は、客観的認識の対象(観念)、つまり対象的に成立する現象的对象ではなく、ある種の信念、「信じること」に対応する対象「想念」である、というのが、この種の問題を解決するためのピランの基本的着想となっている。認識の対象と信念の対象を明確に区別せず、そのあいまいさを利用しながら自らの主張を跡付けるとというのが、これまでの形而上学的主張に通底する基本的な誤謬、「誤謬推理」であり、「論点先取り」である。それがまた、デカルトのみならずライプニッツやコンディヤックに向けられたピランの批判的コメントの主旨であった³⁶⁾。

そこで、ピランの提示する解決法について簡略に見ておこう。コギトの解釈の問題に映

33) 生得観念やその外的適用を「媒介するもの」の必要を語ろうとする件で、〈意志に基盤をおくコギト〉が語られる。例えば、*Ibid.*, pp. 127-129. 観念とその実在的適用とが事実上媒介されることなく成立するかのよう論証される点を、特にライプニッツについて批判している件である。デカルトについての批判の仕方は微妙である。ライプニッツと共有する基礎的誤謬(生得観念の源泉の問題 cf., *Ibid.*, p. 122)については同様に批判されつつも、コギトの主旨は、ある意味で正当に受継がれる、と言える。

34) ピランの表現でデカルトのコギトを正確に言い換えれば、「私は考える、ゆえに私は実在的かつ実体的にあるものである (je pense, donc je suis réellement et substantiellement une chose)」(*Ibid.*, p. 128. イタは原著)ということになる。

35) 『関係』A, VIII, pp. 88-90.

36) コンディヤック(経験的感覚)とデカルト(生得観念)との「中間的方法」、事実に基づきつつ本体的領域とも通じうる方法、「媒介的方法」をピランは求めるのである。

して、デカルトに対するピランの方法論的差異、「ピラン的コギト」の特質を確認しておく。

結論から言えば、デカルト的コギトを身体的レベルで、つまり心身結合のレベルで展開しようというのが、ピラン的コギトの特質である、と言えよう。つまり、身体性をそぎ落とすことで存在の絶対性を獲得するデカルト的コギトに対し、身体との不可分の有り様、つまり原初的事実の二項的關係から出発するピランのコギトは、その始めから身体と思考なり意志は関連づけられてあり、いずれから始めるべきかとか、いずれがより確実であるかとかいうことはもとより問題にならない。心身の二項的關係が、いきなり原初的事実として、自我の「直接的な内的感覚」として提示される構造になっている³⁷⁾。精神の存在の論証に先行され、しかも神の存在証明に媒介されてはじめて（間接的に）証明されるような物体・身体³⁸⁾の存在の捉え方ではない発想を、精神と身体（物体）を同じ事実段階において確実なものとする着想を、語ろうとするのである。ここで精神と身体、物体という言葉を使って説明しているが、それはデカルトの意味においてであって、ピランのそれではない。ピランにとって原初的に確実なことは、意識事実としての自我であり、その努力・意欲の直接的な内的覚知として、内在的〈事実〉として確証できる自我であって、信念の対象たる実体的自我、つまり想念としての魂や精神なのではない。

あくまで事実に確認できる認識の領域に入り込む確実性として意識事実を提示するとともに、そこで感じられる意欲とその運動的結果のうちに「因果性」の想念の源泉を見るのである。原初的事実は〈認識〉の始まりであるとともに、〈信念〉の源泉、信念の対象たる〈想念〉の源泉でもある。

こうしたメヌ・ド・ピランの基本的着想は、前述したようにデカルトの語るところと深いところでリンクしているように思われる。あるいは、その着想において共通のものがあると言いうるであろう。ピランもまた、それは認めるところである。親近性の論拠として、彼は「アルノーあての手紙」（1648.7.29）を採り上げる。いわゆるコギトではなく、「心身結合」の問題を論じた一節である。「魂が身体を動かさうる仕方、身体が魂の変様に影響を及ぼさうる仕方について、われわれは（現実的にも可能的にも）どんな客観的認識ももたない、とデカルト極めて的確に指摘している」³⁸⁾と、まず紹介の主旨を語った後、次の箇所をピランは引用する。

われわれの魂が動物精気を身体の中に送り込む仕方についてのいかなる認識もわれわれは確かにもたない。というのも、この仕方は魂のみに依存するのではなく、魂と身体との結合に依存するものであるから。しかしながら、この活動が魂のうちにあるかぎりで（つまり、意欲された努力が、それ自身のうちで原因として覚知されるかぎりで、

37) 「(……) 最初の行為、魂の最初の努力と同一的なこの事実から出発すると、魂が自己を自我として覚知ないし認識し始めるのは、身体、あるいはその運動的力が直接的に適用される項との関係において、潜在的なものから現実的なものへ、可能的存在から現実的存在への移行を介してでしかない。そして、その展開の項とは分離しており、単に異なるだけではない絶対的力の十全的な想念にまで精神は至りうる、と想定するにしても、人間の個体的存在の事実を構成するこの関係の（二つの）項の一方の实在性を他方よりも確信する、などということはあるまいであろう。というのも、絶対的のものへの信念は、それを抽象作用によって考えるとき、二つの項のいずれとも同じ程度に密着しているからである」(Ibid., pp. 112-113)。

38) Ibid., pp. 160-161.

さらに、帰結において、あるいはそれに後続ないし随伴する運動のうちで、結果として感じられるかぎりで）魂が神経を動かすその活動全体についての認識をもっている³⁹⁾。

さらにピランは続ける。

身体的ではない精神（つまり、意識という事実そのものによってその適用の直接的項とは異なる、自我としての努力の主体）が身体を動かすことができる、ということのをわれわれが知りうるのは、他のものから引き出される推理でも比較でもないが、しかし、そのことをわれわれは疑うことはできないであろう。というのも、それは、内的な経験がわれわれにいつも顕示している直接的な明証的事実そのものであるのだから⁴⁰⁾。

心身結合の事実の確実性と認識の不可能性が同時に提示されている件であり、その確実性の限定に関して、メヌ・ド・ピランの基礎的なタームを通しても解説されている件（括弧内の文言）である。コギトの確実性のどこを残し、どこを削除するかが、心身結合についてのデカルトの表現を介して、つまり、デカルト自身の言葉を借りて表現されている⁴¹⁾。

原初的事実に依拠することで、個人に関わる心身関係から、「自然科学と心理学との関係」という学問の方法論の問題まで、共通の視点で見通せることになる。ピランが本書で検討した自然科学的方法の適用の問題も、事実、還元不可能な「二つの視点」の提示によって回答を与えられている。現象の原因を探究することを最終的な目的とする自然科学の方法的規律は、原因ないし「因果性」の想念についての理解なしには、その目的を達しえない、とピランは見なす。その違いの自覚から、むしろ心理学的探究の原初性を理解すること、心理学もまた自然科学的知見を取り入れるのに、それぞれの視点の決定的差異・対立について自覚することが肝要である。「内的視点」（原初的事実に関わる心理学的方法）と「外的視点」（自然科学的方法）との決定的違いの指摘である。つまり、

努力とは、身体の惰性ないし筋肉感覚を不可分に含む直接的感觉である。それこそデカルトとともに心身結合と称すべきところのものである。この事実はわれわれが考察するかぎりでは、まったく内的な事実であり、客観的な認識の不可能性がそこにある。
(.....)⁴²⁾

客観的な理解が可能な領域と主観的に感じることに、覚知することしかできない領域とを正しく区別し、その領域的区別に適応した方法を使用すべきである、というのがピランの立場である。心身関係の問題、ひいてはコギトの問題がそうした領域なのであり、そこに

39) アルノー宛の手紙（1648.7.29）

40) *Ibid.*, pp. 161-162.

41) デカルトの「意志」とピランの「努力」との内的関連を考えるにはうってつけの一節が、同じ頁にある。つまり、「意志の傾向性（私なら意欲された努力と言うだろう）に、神経のうちでの精気の流れと運動にとって必要なすべてが随伴する。それは心身結合というただ一つの事実によって生じるのであり、魂は確実にその認識をもっている（私ならば、自我はその直接的感觉ないし内的覚知をもつと言い、客観的な認識をもつとは言わないだろう。というのも、手足を動かす意志ないし意欲された努力は、それ以外の仕方では生ずるのではないからである）」（*Ibid.*, p. 160）。

42) *Ibid.*, p. 161.

外的視点、自然科学的視点を無媒介的に導入してはいけない、ということである。コギトの創始者にしてすでにその過ちを犯している、とピランは断罪する。実体として自己を語ることは、もはや原初的事実での意識・覚知を超出して表現している、という批判の表明である。ライブニッツにしろ、感覚にもとづく認識論の構築をめざしたコンディヤックにしろ、この種の過誤を、デカルト以上に素朴に犯してしまっているのである。

最後に、心理学に寄せるピランの期待を述べた一節を引用して、本稿のまとめとしたい。内的視点を強調しつつ、学問の基礎付けを課題としうる「第一哲学」としての心理学を語る部分である。

(……) 心理学は自然諸科学のうちからデータをもろうことはいかにしてもできないし、そうすべきではない。また、そうした科学に、あるいは、観察し、分類し、法則を措定し、原因を探究する、というその方法に従属すべきでもない、ということになる。というのも、第一に、データとは原初的事実ないしはそれに結びついてはいるはずの根源的想念であるのだから。ところで、自然諸科学は、対象にのみに注目し、主体に属するもの、従って、意識の原初的事実に属するものすべてを遠ざける。(……)⁴³⁾

対象化できないものを、対象的に、客観的に分析することはできない。主体と客体、主観と客観という根源的な違いが、異なる方法を採らしめていることに注意を喚起している⁴⁴⁾。心理学は自然科学から安易に方法とデータを受け入れるべきではない。むしろ心理学は、「第一哲学⁴⁵⁾」的自覚をもって⁴⁶⁾、自我の能動性を基盤にしなが、自然科学に向けて、「因果性」の問題については自ら提言すべきである、と語ることになる⁴⁷⁾。

(生活科学部 生活社会科学科)

43) *Ibid.*, p. 213.

44) F. アズヴィも、前掲『Maine de Biran la science de l'homme』で、二つの科学の決定的違いを印象的に描写している。つまり、「上流において、外的視点と内的視点とのこの区別は、表象作用と内的覚知という《能力》的な区別に基礎づけられている。下流では、その区別は、《事実の二つの秩序》と二つの科学、自然の科学と心理学との区別を基礎づけている」(アズヴィ、前掲書、p. 292)。

45) 旧来の形而上学つまり第一哲学の課題をこれからは自らが引き受ける、という気概を心理学に期待するのである。Cf., *Ibid.*, pp. 213-214. 本稿註25に訳出した箇所を参照のこと。

46) グイエ、前掲書、pp. 269-270。「メーヌ・ド・ピランはわれわれのカントである」という、ラシュリエのことばをコメントして、それは「ピランの哲学がカントの哲学〔超越論的主観〕を必要としない」と解釈すべきである、とグイエは語っている。「心理学的主観と区別された超越論的主観はない」という立場がピラニズムの基本思想であり、心理学的主観のままで、形而上学的であろうとするのである。cf., H. グイエ『メーヌ・ド・ピラン 生涯と思想』(サイエンティスト社、1999)、pp. 147-148.

47) なお論考の筆を擱くにあたり、本稿が椋山女学園大学「学園研究費助成金B」に支援されて成立したものであることをここに記して、感謝の意を表したい。